



東京府豊島師範學校教官
東洋音樂學校講師

山本正夫著

唱歌ペイジエントの研究

東京大明堂書店藏版



金 波 銀 波

mf

金 波 銀 波

イ マ シ モ ノ ボ ル ア サ ヒ ニ
 い ま し も し づ ぶ ゆ ふ ひ に

f

ゴ コ ウ ハ ヨ モ タ ソ ノ ツ ツ
 ひ と す ぢ あ か く そ め つ つ

レ ロ ガ ネ ノ ナ ミ ハ タ ダ セ ヨ フ
 こ が れ の な み ぞ よ せ く る

六五

ハ テ シ モ ワ カ ス ウ ナ バ ラ オ キ
 は て し も し ら め う な ば ら お き

ニ ハ シ ラ ホ ミ ツ ヨ ツ
 に は し ら ほ み つ よ つ

唱歌ペイシエントの研究

黄金の波ぞ寄せくる
 涯てしも知らぬ海原
 沖には白帆三つ四つ。

一
 今しも昇る旭に
 後光は四方を染めつゝ
 白銀の波は漂ひ
 涯てしも分かぬ海原

二
 今しも沈む夕日に
 一筋赤く染めつゝ
 空には鷗三つ四つ。

金波銀波
 犬童球溪作歌

六四

我不關焉と専念詩を作ることには没頭して居た。これを知つた彼の友人の悉くは、皆その行動を非難痛撃して、非愛國的なることを責めた。

然るに不世出の天才詩人ゲエテは、手を舉げて友人の口を制して徐々に言つた。「ナポレオンの騷擾の如きは一時的の現象であるが、思想界の動亂は、實に人類永遠の休戚に關する重大事變である。これを平定しこれを嚮導するのは、銃劍にあらずして、これ唯だ藝術の力によらねばならぬ。即ち予はこの偉大なる戦争のために筆を以て戦つて居るのである」

と、言つて遂に戦争に参加しなかつたとのことである。この場合に於て此の言動の是非は扱措き、ゲエテの詩と云ひ、前のワグネルの樂と云ひ、何れも人類愛、祖國愛の遠大なる理想を指して、組織されたる藝術の大城廓である。

「旭日旗の光よ永久に鮮麗なれ」と云ひ、「日出づる國に榮光あれ」と云ひ、又た「旭日昇天」にしても、巻頭の「耀け日の丸」にしても皆小品の作ではあるが、これを作るの動機と熱誠とは、決して曲の大小によつて相違するものでない。城を陥すのも、兎を捉ふるのも亦全力を盡すものである。音樂歴史あつての大事件と謂はれて居る、佛蘭西の現國歌「La Marseillaise」にしても、數千の異民族が集つて一國となせる米國の

人民をば統一融和するの名曲と呼べる。「Hail, Columbia」にしても、其形式は極めて小品曲にして、小節の數より云へば「旭日旗の光よ永久に鮮麗なれ」の曲より遙かに短形式である。而して其感激は、一曲を謠ひ終るに四時間を要する大歌劇曲と比較して必ずしも鮮少なりとは云へまい。

前代未聞の非常時局に際して、我等は何を爲すべきか先づこれを打開しなければならぬ。重疊襲來する大なる國難に當つて、我等は何を爲すべきか、須らくこれを切り拂はねばならぬ。これをなす道は他に無くして、全國民が愛國自疆の心の統一が第一である。さまざまなる施設工作素より大切であるが、先づ基礎を此所に置かねばならぬ。これだにあらば此難局に處して防備の核心が確立されるのである。

微なりと雖も、特選三曲は、たゞ斯道の諸君士、知れる知らざるの多數の友によつて、謠はれ、放奏され、演技される、に至つたものから、今茲にペイジエントに仕組んで、本篇の卷末に載せた所以である。斯道向上の一助となるあらば此上なき光榮である。

終りに臨んで本書讀破の諸君に謝意を表すると共に、本書發行所なる大明堂主が、如斯き草叻の新藝術普及のために、巨資を抛つて上梓公表されたことを深く感謝する。以上、

昭和九年五月八日印
昭和九年五月十二日發行

518

● 製 複 許 不 ●

唱歌ペイジエントの研究

定價金 貳圓

著 者 山 本 正 夫

發 行 者 東 京 市 神 田 區 小 川 町 三 丁 目 廿 二
神 戶 文 三 郎

印 刷 者 東 京 市 牛 込 區 榎 町 七 番 地
西 脇 勝 太

發 行 所 大 明 堂 書 店

東 京 市 神 田 區 小 川 町 三 丁 目 廿 二 番 地
電 話 神 田 二 三 二 九 番
振 替 東 京 四 七 七 八 番

—(刷 印 社 會 式 株 刷 印 清 日)—